

連載「音楽とキャリア 人生 100 年時代に向けて」

第 1 回：リーマンショックと東日本大震災

音楽界に与えた影響

音楽学者 久保田慶一

1. リーマンショックと EU 危機

2008 年 9 月 15 日、アメリカの大投資銀行の「リーマン・ブラザーズ・ホールディングス」が、住宅ローン（サブプライム・ローン）の不良債権化問題で経営破綻した。この経営破綻は 1 国の 1 銀行の破綻に終わらなかった。これら商品を購入していた欧米の銀行もたちまち信用不安に陥れ、金融の流動性が一気に低下してしまったのだ。これが 2007 年から翌年に発生した「金融危機」である。

一方 2013 年にはリーマンショックの影響が冷めやらぬ EU を、ギリシャの粉飾決算問題から生じた「欧州債務危機」が直撃した。さらに 2015 年になると、アラブ・イスラム諸国からの難民が大量に EU 領内に押し寄せ、国内でのポピュリズム政治を助長した。これを象徴したのが、イギリスが国民投票で EU 離脱を決めてしまうという、前代未聞の出来事である。2019 年 2 月の時点で、「ブレグジット Brexit」の行方は不明である。

日本ではリーマンショックの影響は限定的ではあったが、バブル経済の崩壊からいまだに立ち直れていない日本経済の回復には決していい要因ではなかった。企業の倒産、派遣社員の解雇などが続き、2009 年 8 月の衆議院選挙では、福祉政策の充実など国民の生活不安の答える政策（マニフェスト）を掲げた民主党が大勝して、民主党政権の誕生をもたらした。

2011 年 3 月 11 日、「東日本大震災」が東北地方を襲い、さらに福島第 1 原子力発電所の事故が起こった。民主党政権は、この災害や事故への対応を誤り、さらに沖縄の普天間基地移転問題でも対応が二転三転してことで、国民の信頼を失い、民主党政権はあえなく崩壊した。

これに代わって 2012 年 12 月、自民党の第 2 次安倍内閣が成立し、「3つの矢」、すなわち「大胆な金融政策、機動的な財政政策、民間投資を喚起する成長戦略」を嚆矢とする「アベノミクス」を展開し、経済的な安定的な成長をもたらし、日本経済はリーマンショック前の水準に戻ったと言われている。

2. 日本における「災後」

「災後」というのは聞きなれない言葉かもしれない。最近では 2018 年 6 月に吉見俊哉氏が上梓された『戦後と災後の間 溶融するメディアと社会』（集英社新書）がある。「戦後」とはアジア・太平洋戦争の後、つまり、1945 年 8 月 15 日あるいは 9 月 2 日以降であり、「災後」とは 2011 年 3 月 11 日に発生した「東日本大震災」の後のことである。

一般に自然災害は、そして今回の原発事故も同様に、「一瞬」にして、家族や友人、家や

家財道具などを奪ってしまう。不幸にも災害に遭遇した人たちは、はかり知れない苦勞をし、不安の中での生活を余儀なくされてしまう。

リーマンショック後、そして日本では東日本大震「災後」に、私たちは自分の将来やキャリアについて、これまでのように語れなくなったように思う。しかしいつまでも貝のように口を閉ざしているわけにはいかないだろう。災害は社会あるいは人にとっては、一瞬のうちに打ち込まれる「楔」のように致命的な傷を与えるが、決して過去と未来を裁断してしまうものではないであろう。「楔」の打ち込まれた跡は残るが、その跡を氣遣うことで、過去を思い出し、また未来を描くことができるともいえるからである。

3. リーマンショック後の欧米の音楽状況

筆者は2018年に『音大性のキャリア戦略』（春秋社）という本を翻訳・出版した。原書はオーストラリアのキャリア研究者であるドーン・ベネット氏が編集した論文集で、アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリス、オランダの研究者がそれぞれの国において、音大卒業生がどのような教育を受けて、卒業後はどのようにして音楽活動を継続しているのかを、詳しく報告している。原書は2012年の出版で、各執筆者の記述はおおむね2010年以前の状況についてであったことから、日本で翻訳・出版されるに際して、リーマンショック後の様子を報告するパラグラフを、執筆者たちに新たに執筆してもらった。ここでは、アメリカ、EU、イギリスについてその一部だけを紹介しておきたい。詳しいことを知りたい方は、ぜひ、翻訳書を参照してもらいたい。

アメリカではグローバル経済の変化が最も顕著に表れているようである。音楽家を含めたほとんどの労働者が、個人授業者のフリーランサーか、複数のパート労働、俗にいう「サイドジョブ」で生活する人かになってしまったという。こういう時代になって、音楽家は起業について、考えなくてはならなくなっているという。

EUは複数の国があって、「ヨーロッパの現況」として説明することは難しいという。しかし共通する傾向として、クリエイティブ産業が成長していること、音楽家はフリーランスとしてポートフォリオ・キャリアで働くことが多くなったこと、起業精神が求められる働き方が重要になっていることなどが挙げられている。また1998年にはじまった「ボローニャ・プロセス」が2010年に完了して、EUの高等教育機関での教育研究活動の連携が進んでいることは、EUの大きな特徴となっている。そして2011年から2014年にはヨーロッパ音楽大学協会は「起業教育としての生涯学習」というワーキング・グループで、音楽の起業モデルや、音楽大学や職業現場における起業精神の育成の方法を研究し、ヨーロッパの音楽高等教育にイノベーションを起こそうととしている。

現在（2019年2月）、イギリスのEU離脱問題は、行方がまだ定まっていない。しかしさまざまな分野で深刻な影響が出ているようである。特に、教育と芸術の分野は財政面での削減と改革が進められ、学校の音楽教育では、予算が削減されたことで、音楽の専科教員の数が減少し、それによって音楽を学ぶ児童や生徒の数も減っているという。こうした背景から音楽大学の卒業生にとっても、変化する政治的・社会的・財政的な状況に機敏に対応できる、柔軟性のある

自分（アイデンティティ）を涵養していくことが、以前にもまして重要になっている。その具体例として、王立音楽院（RCM）の新しい取り組み「芸術と健康」に関するプロジェクトと修士課程に設置された「演奏科学修士」課程が紹介されている。

4. 「災後」の音楽状況

(1) 仙台フィルの取り組み

2011年3月11日の東日本大震災は、仙台市を拠点とする仙台フィルハーモニーとその団員に多くの被害をもたらし、団体の音楽活動のみならず、音楽家としての団員個人にも大きな影響を与えた。活動拠点であった仙台市青年文化センターは多大な被害を受け、活動の場所を失った。しかし仙台フィルのメンバーは、震災からわずか2週間後の3月26日に、第1回復興コンサートを実施している。しかも会場になったのは、仙台市宮城野区にある佛光山見瑞寺境内にあったバレエスタジオであった。

この復興コンサートの実施に至るまでに、団員たちにはさまざまな葛藤があったことを、秋山結衣が報告している。「食べ物も水もないと困る中で、はたして自分たちの仕事は何か意味があったのか」という自問自答を繰り返した団員の言葉が報告されている。同じ思いは、他の楽団員からも聞かれる。「何もやらなかったら今まで何のために音楽を勉強してきた、そして何でプロのオーケストラである仙台フィルが仙台にあるのかっていう意味がなくなっちゃうでしょう。だから、何らかの形で動いて役に立とうっていう気持ちがみんなあった。」あるいは、「音楽によるいつもの感動とは異なる種類の思いが、大災害を経験した皆さんにもあったようです。...われわれは、音楽を求めている人がいる限り、音楽を提供する義務があるのだと確信しました。また、演奏に集中することによって私の精神のバランスがとれて、私自身が癒されていることにも気づきました。」

東日本大震災の後、被災地のみならず、全国各地で、被災地の人たちのためにと多くの音楽会が開催された。このようなとき、本当の意味での「音楽の力」を理解していないと、反感まで招くことはないにしても、音楽の押しつけや偽善になってしまう恐れがある。音楽は人の心を癒す力があることは確かであるが、音楽を提供する人がその力を持っているわけではないことを、自覚してもらいたい。音楽に耳を傾けて自分のこれまでの経験の中に、今聴いている音楽を注ぎ込んでくれる人がいるからこそ、音楽は力を発揮するのである。音楽が演奏する人と聴く人との間に共有されることで、両者の間に化学反応が起きて、人と人が音楽を通してつながりあうのである。音楽はこのような化学反応の「触媒」となるのである。

(2) エル・システムジャパンの取り組み

エル・システム、1975年にベネズエラの音楽家ホセ・アントニオ・アブレウ(1939-2018)が「国立青少年オーケストラネットワーク」である。貧困層の子どもたちに無償で楽器や教育を提供し、自ら学んで社会に積極的に参加する意欲に乏しい子どもたちに、将来への希望を持つようなきっかけを提供している。

2012年3月23日、東日本大震災からちょうど1年が過ぎたころ、「般社団法人エル・システムジャパン」が設立された。2か月後の5月には、福島県相馬市と「音楽を通して生きる力を育む」事業に関する協力協定を締結して、活動を開始した。その後2年後には岩手県大槌町、

そして2017年には長野県駒ヶ根市との連携協定に至り、震災後の復興支援からさらに芸術を生で体験する機会の少ない地方へと、活動領域を広げている。

エル・システマの理念を掲げて音楽教育を普及させたことで、相馬市には「相馬子どもオーケストラ&コーラス」が結成され、現在、総勢120名の子どもたちが、音楽活動を展開している。また大槌町では「大槌子どもオーケストラ」が結成された。駒ヶ根市では学校支援や音楽教室の開設など、各地域のニーズに応じて、音楽が地域や社会に対してできることが模索され、実現されているという。

芸術を生で体験することが難しい人というのは、地方で生活している人だけではない。障害を持った人、特に、聴覚障害のある子どもたちは、音が聞こえないだけでなく、発話も困難になる。しかしこうした聴覚障害の子どもたちが「手歌」で合唱を行う「東京ホワイトハンドコーラス」が設立されたのも、エル・システマジャパンの活動のひとつである。You tubeでホワイトハンドコーラスの演奏や練習風景を視聴できるので、ぜひご覧になっていただきたいと思う。また今後は聴覚障害者だけでなく、発達障害や四肢障害などのある子どもたちにも、さらなる参加を呼び掛けるといふ。

5. レジリエンスからプロスペクトへ

「レジリエンス resilience」という言葉をご存知だろうか。もともとは物理学の用語である。例えば、ボールに力を加えると、ボールはへこむが、力を抜くとまた元の形に戻る。このように外からの力によって生じた歪みを跳ね返す力のことである。心理学では、人が辛い状況 事故、貧困、虐待など、人に精神的苦痛を与える事象は多々ある に置かれた後に、立ち直る精神力のことを意味する。

同じような辛い状況に置かれても、人によって受ける精神的ダメージは異なるし、また回復する時間も人によってさまざまである。心理学的な研究によれば、自分を肯定的にとらえられる人、将来を肯定的にとらえられる人、自分の置かれている状況が客観的に見られて感情のコントロールができると人が、レジリエンス力が強いと言われている。

実際に東日本大震災のような災害を被災して、大切な人や物を失った人たちに対して、上述したような考え方や気持ちを持ちなさいというわけではない。ただ日々の生活の中で、比較的小さな問題や困難に直面したときに、冷静になって、レジリエンス力を高める訓練をしてもいいのかもしれない。

とりあえず今できることから始めて、これを経験することで、一皮むけた、新しい自分が発見できると信じることである。楽しいことを考えて、その実現をめざして、一歩踏み出す。何とかなるだろう。あるいはなるはずだ、自分には何とかできるだろうと、根拠のない自信も、このときは大切であろう。こういった将来を「プロスペクト」、つまり見通すことが必要である。

秋山由衣 『東日本大震災後の復興支援における音楽活動の意義 仙台フィルハーモニー管弦楽団と《音楽の力による復興センター・東北》の活動を事例として 』国立音楽大学大学院修士論文 2015年度